

高得宗「弘化閣記」について

Honghwagakgi by Go Deukjong
YONETANI Hitoshi

米谷 均

はじめに

「辺境」は、「本土」の目線があって始めて成立する概念である。「辺境」に対するおおかたのイメージは、地理的には中心から隔絶した地であり、文化的には都と異なる鄙びた風俗を固持する化外の地、という具合に否定的に語られることが多い。一方、その地が異国・異域と接している場合は、外国の珍しい産物をもたらす窓口として、若干の憧憬が込められてイメージされることもある。日本でいえば対馬、朝鮮でいえば済州島が、そうした異産異貢の「辺境」の地に該当しよう。

ところで「辺境」のイメージを作り上げる主体は、「本土」の都に居住する者、ないしは中央からその地に下向した地方官や旅行者であることが多い（藤田・李・河原二〇〇）。これと比べて、「辺境」の人間が「辺境」の立場から自己認識を展開するような史料は、圧倒的に少ない。換言すれば、「見る人」の立場による記述の方が、「見られる」立場の人間の記述の量をはるかに凌駕しているのである。「見る人」も「見られる

人」も諸共に、如露亦如電に「辺境」を是くの如く観て語る史料は、まこと稀である。

そうしたなか、本稿で紹介する「弘化閣記」は、右の条件を充足している史料である。その撰文者である高得宗は、済州島という「辺境」出身者で、かつ都で異例の出世を遂げた高官であり、土地の有力者の子孫として何度も漢城と済州島を往復した人物である。「弘化閣記」は、弘化閣という済州島の官衙建築の竣工を記念して撰文された文章である。そこで高得宗は、己を済州島の「郷人」と位置づけた上で、都人の視点も交えつつ、うまし我が故郷を熱く語っている。こうした複眼的な視座をもって作られた「辺境」史料として、本史料は極めて貴重であり、紹介するに価すると思われる。

一 高得宗について

高得宗の経歴については、すでに高橋公明が詳しく論考している（高橋一九九〇）。その成果をもとに、『朝鮮王朝実録』所収の関連記事を再

検討しつつ、まずは高得宗の生涯を概説したい。なお典拠の『実録』の掲載箇所は、『太宗実録』太宗七年五月辛酉（八日）条の場合は、『太宗』7年58辛酉の如く以後略記する。

『国朝榜目』によれば、高得宗は、字は子傳、本貫は濟州で、父は高鳳智といい、太宗十四年（一一四四）の甲午親試乙科三等を受験し及第したと言う。高得宗の祖父である高臣傑、および叔父の高鳳礼は、濟州島の王族の末裔である「星主」として、島内に甚大な勢力を保っていた（『新增東国輿地勝覧』卷三十八）。高鳳礼は、中央政府から右軍同知摠制や濟州安撫使にも任命され、島内統治に公的にも携わっている（『太宗』7年58辛酉、10年54庚午）。高鳳礼は一一四一年に没し（『太宗』11年1129丙戌）、その庇護を受けていたであろう高得宗は、恐らく叔父のために三年の喪に服し、喪が明けた一一四一三年に濟州島都安撫使から「孝子」として褒賞されている（『太宗』13年611戊午）。なおこの時、彼は生員の肩書きを有しており、文科の前段階の科擧である生員科に及第していたことが分かる。一一四四年の文科及第後、彼は居を漢城に移したのであろう。一一四一七年に成均館注簿に、一一四一八年には司醢署令になっており、米や木綿や女服を金銀と交易するため、後者の肩書きにて漢城から濟州島に派遣されている（『太宗』17年511丙寅、18年626乙巳）。彼はまた、一一四一八年には濟州敬差官、一一四九年には承文院校理、一一四二四年には奉常寺僉正の肩書きをもって濟州島へ派遣されているが（『世宗』即位年1022戊戌、元年1115乙卯、6年117戊寅）、これは官僚をその出身地に遣わすことを避ける人事原則から言えば、まことに異例である。しかも一一四一八年の派遣時には、銀一七七一兩を濟州島で購入して漢城に帰るなど、大々的な交易活動を公認されていることは、特別待遇以外の何物でもなく、恐らくこうしたことが中央官僚の嫉視と弾劾を買う原因となったものと思われる。

また彼は、濟州島における牧馬の見識が高いことを買われて、武官職

の大護軍の肩書きをもって、一一四二五年に江華島へ派遣され、適地の選定や所見の提示などを行っている（『世宗』7年1026辛卯、7年118癸卯、9年62己未）。一一四二九年には、濟州島の漢拏山周辺に放牧場を設けて、官有・私有を問わずに馬を放牧するよう、上護軍の肩書きにて上言しているが（『世宗』11年826庚子）、翌年には、濟州島で起きた官馬の被害案件につき、故無く連坐して笞刑を受ける憂き目に遭っている（『世宗』12年1114辛亥）。また濟州島の民政問題について、高得宗は積極的に意見を述べており、濟州島で捕縛された「倭寇」の殺害事件につき弁明したり（『世宗』12年1013庚辰）、濟州牛の徴発計画につき、濟州島では牛の糞は田地の肥料として不可欠であることを説明して、これを回避しようと働き掛けている（『世宗』13年128癸巳）。高得宗は一一四三三年に僉知中枢院事、翌年には礼曹右参議となるが（『世宗』15年122辛亥、16年311戊申）、丁度このころ濟州島ではひどい旱魃被害に遭っていたようで（『弘化閣記』）、高得宗は濟州島への救済策を求め、戸曹から雜穀七〇〇石を送付されることが一一四三四年初頭に認められている（『世宗』16年130戊申）。ところが濟州島の優遇策をしばしば求める高得宗の態度は、司憲府などの弾劾機関から疑いの目を招いた。一一四三四年、濟州島の牧馬をめぐる高得宗の提言が、「撫綏の恩を顧みず、反つて利己の計を懐く（民を慈しみ安んじる国家の恩を顧みず、逆に自己の利益を得ようと心指す）」ものと非難され、礼曹参判を罷免されることとなった（『世宗』16年619甲子）。これに対して高得宗は、批判を浴びた漢拏山周辺の地は放牧地として適していること、官馬の被害が出たのは馬泥棒（馬賊）や旱魃に原因があること、等々の抗弁を試みるが（『世宗』16年630乙亥）、司憲府は「自己の非を念わず、以て上言して咎を本府に帰するに至る（己の誤りを認めず、国王殿下に意見して、罪を司憲府に押しつけようとしている）」と弾劾し、さらなる重罰を求めるに至った（『世宗』16年71丙子）。そうした逆境の中でも、濟州島

で公私の牛馬を盗殺する輩は平安道へ強制移住すべし、という強硬案に
対し、高得宗は、牛馬の盗殺が横行する背景には近年の凶作がある、と
述べ、強制移住は悪質な輩のみに限定すべきである、との緩和策を上言
している（『世宗』16年8月28日）。このように彼の提言は、常に済州島
民の立場に立つて考えられたものであり、国王世宗もまた、彼を深く信
任していた。ところがこうした世宗と高得宗の信頼関係が、司憲府など
の弾劾機関にかえって強い反感を招く結果をもたらしただけである。

一四三五年、高得宗は礼曹参議に復帰した（『世宗』17年2月6日）。
しかし二年後の正統二年（一四三七）正月十六日の年紀を持つ「弘化閣
記」には、「郷人前、礼曹参議高得宗」と署名されているところから、あ
るいは再び免職されたのであろうか。同年冬、高得宗は僉知中枢院事に
叙任され、翌年初頭にも同職の叙任記事がある（『世宗』19年10月24日、
20年1月24日）。一四三八年には高得宗は戸曹参議となっており、同年、
種馬五〇匹を明に献上する管押使として、元旦を祝賀する正朝使とともに
北京へ出発した（『世宗』20年1月24日）。この使節は翌一四三九年に
帰国を遂げるが（『世宗』21年2月23日）、同行した義州通事が明で受領
すべき賞賜品を、高得宗が自分の庶子に受け取らせたことは不正である
と、司憲府によって告発され、戸曹参議を罷免された（『世宗』21年4
月15日）。高得宗に対する攻撃は、刑曹や司諫院も加わって増幅され、
僉知中枢院事の辞令書（告身）剥奪が決定された（『世宗』21年4月20日
西）。しかし結局、告身は返還され、日本へ派遣される通信使に任命さ
れた（『世宗』21年4月29日）。その後も司憲府の弾劾がしつこく続いて
いるところから見て、高得宗の通信使任命は、外国へ送り出すことで彼
への弾劾熱を冷まそうとする世宗の計らいである可能性がある。その後、
高得宗は通信使団員の遵守規定を報告し、世宗に謁見して日本国王あて
国書を受領し、さらに世宗から直に書を賜って使命の本分を伝えられて
いる（『世宗』21年7月3日、7月11日、7月12日）。翌一四四〇年、高

得宗一行は無事に帰国し、世宗の引見を受けた（『世宗』22年5月25日）。
そして高得宗は、対馬島民の孤草島への釣魚を許すよう島主宗貞盛が懇
望した旨を政府に伝え、議政府によって審議が始められた（『世宗』22
年5月29日、6月12日）。これは翌一四四一年、「釣魚禁約」として実を
結び、対馬島民の孤草島（巨文島と推定）への出漁が認められるに至っ
た。一方、通信使副使の尹仁甫の願いを聞いて、彼の妾の弟である辛
トという金海の官奴を偽って乗船させたことが司憲府によって告発され、
またも高得宗は弾劾を蒙った（『世宗』22年6月18日）。しかし処罰は免
れ、一四四一年には同知中枢院事に昇進している（『世宗』23年6月11日
子）。しかし同年、高得宗が義禁府提調に任命された時、通信使に同行
した辛トの一件が蒸し返されて、最終的にはこの任用は撤回されたよう
である（『世宗』23年7月17日）。

一四四一年、同知中枢院事から中枢院副使に叙せられていた高得宗
は、明の皇帝の誕生を慶賀する聖節使に任命されたが、またしても司
憲府から強い反対意見が起された（『世宗』23年8月4日、8月5日、
8月7日）。世宗はこれを全て却下し、高得宗ら聖節使一行を引見して
明に送り出した（『世宗』23年8月13日）。しかし一行は帰国後、逮捕さ
れて義禁府に収監された。高得宗が世宗の病状を礼部尚書に漏らし、皇
帝からの薬の下賜を勝手に求めたこと、および朝鮮の国境地帯を荒らす
女真族への討伐を、明に独断専行で求めたこと、等の罪が問われたた
めである（『世宗』23年閏11月20日）。重罪を求める義禁府や司憲府に対
し、世宗は高得宗のみ黄海道江陰県に配流とし、他の団員の罪は問わな
いとの決定を下した（『世宗』23年12月15日）。その後、女真問題の調査
のため朝鮮に派遣された明使の呉良から、高得宗の釈放要請が行われた
り（『世宗』24年1月22日）、または世宗が高得宗の処罰軽減を命じたこ
とに対し、司憲府ら廷臣が延々と反対意見を開陳したりした（『世宗』
24年6月9日、6月10日、6月11日、6月13日）。結局、高得宗に対す

る処罰は、漢城入城は不可であるが行動の自由を一定程度認める「外方従便」刑に決し（『世宗』25年6月13日丙申）、二年後の一四四五年に、晴れて釈放となった（『世宗』27年5月22日乙未）。

一四四七年、高得宗は転運使という漕運部門の臨時職に任命され、同時に同知中枢院事に叙せられた（『世宗』29年10月4日壬戌）。高得宗は海路に詳しいという評判が、任命理由だったのようで、監督困難を理由に陸路の運輸を高得宗が主張した場合は、水路を使うべしとかえって意見を退けられている（『世宗』30年3月16日辛丑）。一四四八年に彼は漢城府尹となるが（『世宗』30年12月1日癸丑）、引き続き転運使を兼任しており、朝鮮北部の貢米の漕運について、世宗の諮問に答えている（『世宗』31年9月5日壬午、9月17日）。この年の一四四九年、高得宗は明に向かう正朝使に再度任命されたが、富商の子を己が奴僕と偽って同行しようとしたことが司憲府によって告発され、この任命は取り消された（『文宗』即位年10月14日甲申、11月16日丙辰）。以後も高得宗は「兵船を漕運船に転用すべからず」「我が国の造船は未熟である」等々、漕運や船舶につき所見を政府に提出しているが（『文宗』即位年12月8日戊寅、1年5月25日壬戌）、一四五〇年に、漕運の不手際による貢米腐蝕の責任者として高得宗の名があげられて以降、彼に関する記述は途絶える（『文宗』1年8月27日壬辰）。その十年後の一四六〇年、原従三等功臣として記録された官僚たちの名簿の中に、すでに卒去した人物として高得宗の名があげられている（『世祖』6年5月25日庚子）。彼の卒伝は『朝鮮王朝実録』に掲載されておらず、死後に文集も編纂されていないため年譜も無く、正確な没年は確定できない。一九七九年に編纂された『耽羅星主遺事』なる書物によれば、彼の生年は一三八八年、没年は一四五二年であるという。なお彼の子息のうち四名は文科を受験し、高承顔は一四二六年に、高台弼は一四五一年に、高台翼は一四五四年に、高台鼎は一四五九年に及第しており、高台弼は開城留守監司に、高台翼は奉常寺正の官職に至っている（『国朝榜

目』、『耽羅誌』乾）。

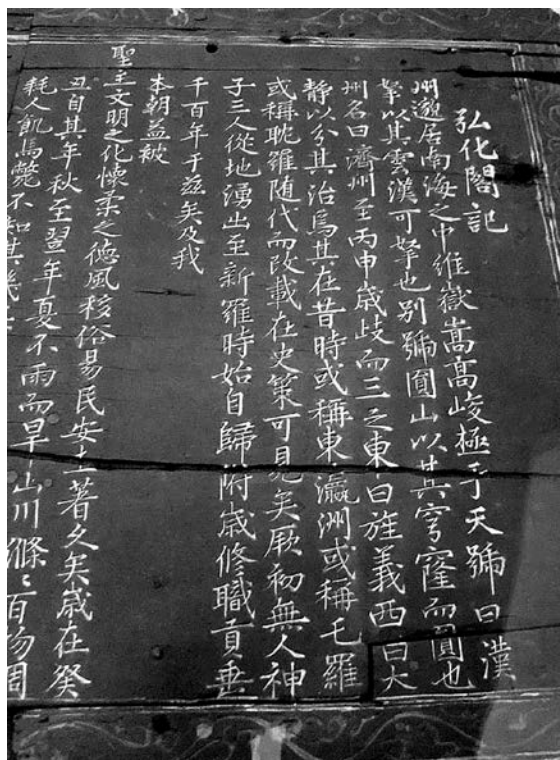
高橋公明によれば、高得宗の世代の済州島人で、中枢院副使（従二品）など、正三品上班以上の堂上官に叙任された人物は、彼が唯一であるという（高橋一九九〇）。まさに故郷の出世頭であった。二度に渉る明への使行と日本使行を一回経験し、礼曹参議・戸曹参議・漢城府尹などの頭官を歴任した。異例の出世を遂げ、国王世宗の信認も厚い「辺境」出身者の高得宗は、それゆえに中央官界の嫉視と反感を大いに買い、司憲府などから弾劾を蒙ること九回に及んだ。なお高得宗は、私的な請託や褒賞の横領容疑、ないしは商人との癒着を思わせるような行為をたびたび犯しており、いわゆる「脇の甘い」人物であったようである。交易や流通に関する彼の積極的な提言と併せて考慮すると、さもありなんと思わせる面が多々見受けられる。

二 高得宗「弘化閣記」（一四三七年）の紹介

二〇〇二年十二月に復元工事が完成した済州牧官衙（済州市觀徳路二五）の敷地には、弘化閣という単層・入母屋造りの建物が立っている。現地発行の案内書によれば、一四三五年に崔海山によって創建され、一六四八年と一七七二年に修造された後、一八二九年に改建されて一九四〇年に撤去されたと言う。この建物に掲げられていた扁額「弘化閣」と記板「弘化閣記」は、現在、高・梁・夫三姓祠財団が経営する三姓穴（同市三姓路二二）展示館に保管されている。扁額「弘化閣」は、横一六三cm、縦六五・六cm、厚三cmの白い板に黒い三字が浮き彫りにされたもので、済州特別自治道有形文化財第三二号に指定されている。一方、本稿で紹介する「弘化閣記」は、横二六三cm、縦六七・五cm、厚三cmの黒い板に白い文字を刻んだもので、道有形文化財第一五号に指定されている。記文を刻んだ板の周りに唐草文様の縁が施され、補強のための板が貼られている。記文を刻字した板は、大きな三本ほど横に走って



扁額「弘化閣」と「弘化閣記」



「弘化閣記」冒頭

いるが、幸い文字を判読する際の支障にはなっていない。

「弘化閣記」には「正統二年丁巳孟春既望」すなわち世宗十九年（一四三七）正月十六日の年紀が刻まれている。記文を刻む板は相当に古びており、右の年紀に作成された貴重な十五世紀の遺物である可能性はあるが、確証は無い。まずはその原文を翻刻掲載した後、読み下しと現代語訳を左記のように示したい。なお通読の便宜のため、固有名詞には左傍線を引き、必要に応じて右傍注を施した。

《原文》

弘化閣記

州遼居南海之中、維嶽高高峻極于天、號曰漢拏、以其雲漢可拏也、別號圓山、以其穹隆而圓也、州名曰濟州、至丙申歲、（四十六年）岐而三之、東曰旌義、西曰大靜、以分其治焉、其在昔時、或稱東瀛洲、或稱毛

羅、或稱耽羅、隨代而改、載在史策、可見矣、厥初無人、神子三人、從地湧出、至新羅時、始自歸附、歲修職貢、垂千百年于茲矣、及我

本朝益被

聖主文明之化、懷柔之德、風移俗易、民安土著久矣、歲在癸丑^(世宗十四年)、自其年

秋至翌年夏、不雨而旱、山川滌々、百物凋耗、人飢馬斃、不知其幾矣、

宸念軫慮、命廷臣、若曰、濟州之地、為我附庸、良馬之出、異貢之產、

國有賴焉、而其地薄民貧、海寇絡繹、草賊竊發、控禦為難、予素^(世宗)

難其守矣、近因旱暵、連歲凶歉、民多飢饉、予甚恤焉、況隔海外尤

遠、於堂下、民之休戚、政之得失、豈予耳目之所能及知乎、宜於兩

府之賢、文武方略、咸惠並著者、慎簡以聞、於是舉、前工曹參判益

陽崔公海山、以聞^(崔海山)

上心載悅、以為允當、即於甲寅秋八月初七日、

命下為都按撫使兼判牧事、公聞^(世宗)

命之日、詣

闕以謝、畧無憚色、卜日以行、及下舟之初、先以救荒之政、汲々於

心、哀矜惻怛、煦濡撫摩、以賑民生、使呻吟者、變為謳歌、餓孍

者、登於仁壽、審理冤抑、獄不滯訟、宣揚教化、民知禮義、以至牧

馬之術、禦寇之備、興學勸農、救災恤患、治人之道、筭無餘策、而

且事神以誠、齋心滌慮、凡有祈祭、悉心、明享以致神格、及明年、風

雨時若、禾乃登場、民樂鼓腹、馬大蕃息、我

殿下、簡賢之恩、深且至矣、公以事輯人和、欲修葺館宇之頽圯、而重其

事、未暇為也、適營失火、歎無所居、只役髡頂者及入番之輩、乃

取破寺材瓦、先起燕寢之室、琴堂、浴房、庖厨、廊舍、厥位乃備小

西、而堅宇三楹、以為便政之堂、左右各有廊、以為分房、案牘之

所、又其西建閣三楹、補以重簷、其規宏而密、其制壯而麗、處之

巍々、望之翼々、塗墍丹雘、奐輪可觀、其南置半刺贊政之堂、其北

置

獻馬立養之廐、東置營庫、西置燠室、以藏

進膳之物、又其南外別構樓門、下通出入、上懸鍾鼓、以設更漏之備、

東藥庫、西廩所、東西對峙、皆繚以垣墻、既礪且堅、凡為屋計共

二百有六間、而每屋別起不相接連、所以備火災也、其經營位置制

作得宜、皆出於公之指畫矣、公一日出坐閣上、召集鄉中父老、以落

其成、且圖所以名之也、或有言曰、濟為州、北枕巨海、浩々蕩々、

一目千里、南對崇岳、鬱々葱々、四時一色、冬無苦寒、夏多涼風、

家々橘柚、處々驕驪、風雲之狀、月露之形、朝暮變化、千萬其態、

而承

命于茲者、登於斯、休於斯、山翠濤聲、常分於几案之上、奇卉異草、

悉萃乎顧盼之間、古有樓而名萬景者此也、幸今有閣、宜復萬景之

名、公曰、不然、予之建閣非為翫景也、非為遊觀也、昔文王之時、

周公治於內、召公治於外、化之及人、如風之動、漸之被之暨之、而

當世之人、莫不鼓舞於德化、變易其氣質、豈非二公贊襄弘化之致

歟、方今

聖明在上、元臣碩輔、同寅協恭、急於求賢、分遣外治、然猶惠澤未窮、

治化未洽者、委任或非其人、奉行未盡其理也、凡分

憂者、日登此閣、無佚遊、無縱欲、思盡委任之責、常以弘

王化、達民情為心、則周之治、可復見於今日、而濟之民、當受福於無窮

矣、然則盍以弘化名此閣乎、於是聞者、咸拜而謝曰、公之命名、能

使後之繼々者、益有所勉、而吾民之永被

仁化者、益可保矣、遂退而請予書弘化閣三字、以揭之、且請為記以垂

後來、予鄉人也、義不可辭、故不揆鄙拙、而為之記

詩曰、
漢拏山峻駕鼉頭 鼓角五更無事曉

山下城居作巨州

謳歌十里大平秋

甘棠惠化医民瘼

傑閣聳飛宏制度

細柳威風破賊愁

後人應說益陽侯

(二四三七年)
正統二年丁巳孟春既望

郷人前禮曹參議高得宗記

《読み下し》

州は邈かに南海の中に居し、維だ嶽は嵩高にして、峻きこと天に極む。号して漢拏と曰う。其の雲漢の拏むべきを以てすれば也。別に円山と号す。其の穹窿にして円たるを以てすれば也。州名は済州と曰う。丙申歲に至り、岐ちて之れを三つにす。東は旌義と曰い、西は大静と曰う。以て其の治を分かちたり。其の昔時に在りては、或いは東瀛洲と称し、或いは毛羅と称し、或いは耽羅と称す。代に随ひ改めたるは、載せて史策に在り。見るべし。厥の初めは人無し。神子三人、地より湧出す。新羅の時に至り、始めて自ら帰附し、歳ごとに職貢を修むること、茲に千百年に垂んとす。我が本朝に及び、益す聖主文明の化と懷柔の徳を被る。風移り俗易わり、民は安らかに土著すること久し。歳癸丑に在りて、其の年の秋より翌年の夏に至り、雨ふらずして早き、山川濂々として、百物凋耗し、人飢え馬斃るること、其の幾ばくやを知らず。宸念軫慮し、廷臣に命じて若く曰く、「済州の地は我が附庸なり。良馬の出と異貢の産は、国焉れに頼ること有り。而るに其の地は薄く民は貧しく、海寇の絡繹し、草賊の竊かに発して、控禦するに難なり。予、素り其の守ることを難しとす。近ごろ早曠に因り、連歲凶歉にして、民に飢饉多し。予、甚だ焉れを恤れむ。況んや海外を隔つこと尤も遠ければ、堂下に於いて、民の休戚、政の得失、豈に予の耳目の能く知り及ぶ所か。宜しく兩府の賢に於いて、文武の方略、威恵並べて著らかなれば、慎簡して以て聞すべし」と。是の挙に於いて、前工曹参判益陽崔公海山、以て聞するに、上の心は載悦して、以て允當なりとす。即ち甲寅秋八月初七日に於いて、命

下りて都按撫使兼判牧事と為れり。公、命を聞くの日、闕に詣りて以て謝す。略ぼ憚色無く、日を卜いて以て行けり。舟を下りるの初めに及び、先ず救荒の政を以て、心を汲々とせり。哀矜惻怛し、煦濡撫摩し、以て民生を賑わす。呻吟する者をして、変じて謳歌を為さしめ、餓孍する者をして、仁寿に登らしむ。冤抑を審理して、獄は滞訟せず。教化を宣揚して、民は礼義を知れり。牧馬の術に至つては、禦寇の備を以てせり。学を興し農を勧め、災を救い患を恤う。治人の道は、算えて余す策無し。而うして且た神に事うるに誠を以てし、心を齋み慮を濳ぐ。凡そ祈祭有れば心を尽し、明享して以て神格に致す。明年に及び、風雨時若なれば、禾乃ち場に登り、民は樂しみ腹を鼓し、馬は大いに蕃息す。我が殿下、簡賢の恩は深く且つ至れり。公、人相を事輔することを以て、館宇の頽圯を修葺せんと欲す。而れども其の事を重んずれば、未だ為すに暇あらざる也。適ま營の失火して、居す所無きを歎く。只だ髡頂の者及び入番の輩を役し、乃ち破寺の材瓦を取りて、先づ燕寝の室・琴堂・浴房・庖厨・廊舎を起こす。厥の位は乃ち小西に備う。而して宇三楹を堅て、以て便政の堂と為す。左右に各々廊有り。以て分房と為す。案牘の所は、又た其の西に閣三楹を建て、補うに重簷を以てす。其の規は宏にして密、其の制は壯にして麗なり。これに処れば巍々なり、之れを望めばに翼々なり。丹雘を塗堅すれば、輿輪觀るべし。其の南に半刺賛政の堂を置き、其の北に獻馬立養の厩を置く。東に営庫を置き、西に煥室を置き、以て進膳の物を蔵む。又た其の南の外に別けて棧門を構え、下に出入を通し、上に鍾鼓を懸け、以て更漏の備を設く。東の葉庫、西の蠶所、東西に対峙せり。皆な繚らすに垣牆を以てし、既に確りて且た堅し。凡そ屋を為すこと計れば共に二百有六間なり。而して屋毎に別ち起きて相い接連せざるは、火災に備える所以也。其の経営・位置・制作の宜しきを得たるは、皆な公の指画より出づればなり。公、一日閣上に出坐して、郷中の父老を召集し、以て其の成を落し、且つ

之れを名づくる所以を図る也。或も言有りて曰く、「済の州為るや、北は巨海を枕とすること、浩浩蕩々にして一目千里なり。南は崇岳に對すること、鬱々葱々として四時一色なり。冬は苦寒無く、夏は涼風多し。家々橘柚あり、処々驂駟あり。風雲の状、月露の形、朝暮變化し、其の態を千萬す。而して命を茲に承る者は、斯れに登り、斯れに休めば、山翠濤声、常に几案の上に分ち、奇卉異草、悉く顧眄の間に萃まん。古に樓有りて万景と名づくは此れ也。幸いに今も閑有り。宜しく万景の名を復すべし」と。公曰く、「然らず。予の閣を建つるは翫景の為に非ざる也。遊觀の為に非ざる也。昔文王の時、周公は内を治め、召公は外を治む。之れを化して人に及ぼすこと、風の動くが如く、之れに漸みて之れを被り之れに暨べり。而るに当世の人は、徳化に鼓舞して其の氣質を變易せざる莫し。豈に二公に非ずんば弘化の致すを贊襄せんか。方今、聖明は上に在せり。元臣碩輔は同寅協恭し、賢を求むるに急ぎ、外治に分遣す。然れども猶お恵沢は未だ窮まらずして、治化は未だ洽からざる者なり。委任するも或いは其の人に非ざれば、奉行するも未だ其の理を尽さざる也。凡そ憂いを分かつ者は、日に此の閣に登り、佚遊すること無く、縦欲すること無く、委任の責を尽くすを思い、常に以て王化を弘め、民情を達するを心と為せば、則ち周の治は復た今日に見わるべし。而して済の民は、當に福を無窮に受くべし。然れば則ち益ぞ弘化を以て此の閣を名づけざるか」と。是に於いて聞く者、咸な拝して謝して曰く、「公の命名、能く後の継々者をして、益す勉める所有らしめん。而して吾が民の永しえに仁化を被る者、益す保つべけん」と。遂に退きて予に弘化閣の三字を書き、以て之れを掲げんことを請う。且た記を為して以て後來に垂れることを請えり。予は郷人也。義として辞すべからず。故に鄙拙を揆らずして之れが為に記せり。

詩に曰く、

漢拏の山峻し 駕龍の頭

鼓角の五更 無事の曉
山下の城居は巨州を作し
十里に謳歌す 太平の秋
甘棠の恵化 医民廩まる
傑閣の翬飛 制度を宏む
細柳の威風は賊の愁いを破り
後人は応に説くべし 益陽侯
(一四三七) 正統二年丁巳孟春既望

郷人前礼曹參議高得宗記す

《現代語訳》

(この)州は(本土から離れた)遙か南方の海中に位置し、山は高く天まで聳えている。号して漢拏と言う。(名の由来は)銀河〔*雲漢〕まで届くようであるからである。別名は円山と言う。中央が高く(裾が)円錐形をしているからである。州名は済州と言う。丙申の年(一四一六)になって、三つに分割された。東は旌義県と言い、西は大靜県と言う。こうして治所を分かった。往昔においては、あるいは東瀛州と言い、あるいは毛羅と言い、あるいは耽羅と言った。世代により改称したこと、史書にも載っており、確認できる。当初(この地には)人がおらず、神の子三人が地から湧出した。新羅時代に、始めて自ら(本土に)帰服した。毎年、貢ぎ物を納めて千百年に至った。我が朝(朝鮮王朝)になって、国王殿下の文明の化と懷柔の徳を益々受けた。風俗が変わって民が安心して土着するようになって年久しい。癸丑の年(一四三三年)、その年の秋から翌年夏に涉って、雨が降らず旱魃となり、山川がからからに乾いて、全ての物が萎み敗れ、人は飢えて馬は死に、それがどれだけの数であるか分らないほどであった。国王殿下は熟慮した末、廷臣に対してこのように仰せられた。「済州の地は、我が国の属領である。良い馬の産出と珍しい貢物の産出につき、国家が頼みとする地であ

る。そしてその地は瘦せて民は貧しく、海賊が続出し盗賊が密かに出現して、防禦するのが困難である。予はもともとその守備が難しいと思っていた。ちかごろ日照りのため連年凶作となり、民の多くは飢えた。予はこのことを大変憐れんでいる。ましてや（済州は）海の外に隔絶しているの、（宮中の）堂内において、民衆の喜憂や政治の得失について、予がどうして熟知できようか。両府の賢人たちは、文武の計略や威恵ともに明らかなれば、慎重に調査して奏聞せよ」と。こうしたなか、前の工曹参判である益陽（*永川）の崔海山公が上聞したところ、殿下は心からお喜びになって、「まさにその通りである」と仰った。ただちに甲寅の年（一四三四）秋の八月七日に、命が下って（崔海山公は）都按撫使兼判牧事に就任した。（崔）公は命を承った日、宮中に参内して謝礼した。（赴任を）忌避するような素振りとはほとんどなく、日を選んで出発した。（済州に）上陸早々、まずは飢饉に苦しむ人々への救済策に心を砕いた。（民を）憐れみ悲しみ、寒さを温め慰めることをもって、民生を活性した。苦しむうめく者を楽しみを歌うように変え、飢えに苦しむ者を命長らう者に押し上げた。無実の罪に陥った者を審議して、裁判が滞らぬようにした。教化を推し弘め、人民は礼義を知ることとなった。馬匹の牧畜術に至っては、寇賊を防禦する備えを第一とした。学問を興し農業を勧め、（民を）災患から救恤した。人民の統治法については、数限りなく方策を施した。また誠意をもって神に仕え、心を慎み配慮を尽くした。およそ祈祭があれば心を砕き、供物を捧げて神に奉仕した。年が明けて天候が順調であったので、穀物は畑に実り民は楽しみ腹鼓を打ち、馬は大いに繁殖した。我が殿下の賢者を選ぶ恩義は、深くかつ行き届いている。（崔）公は人の和合を作るため、朽ち果てた館宇を修復しようとした。しかし事業を重視するあまり、いまだ着手する余裕が無かったところ、たまたま官舎が焼亡して、居住する場が無いことに嘆いていた。ただ下罪人と密出国者を徴用し、廃寺の材木や瓦を用い

て、まずは居間・政務室・浴室・厨房・廊舎を造作した。その位は小西に備えた。かくして屋舎三棟を建て、執務所とした。左右にそれぞれ脇部屋があり、これを個別の部屋とした。公文書の保管地は、その西に樓閣三棟を建て、これに二階屋を補った。その規模は広く緻密で、その制度は壮麗であった。そこに坐せば高大で、それを望めば恭しい。朱の土で壁を塗れば、美麗で壮大な様は見られるべきものがある。その南に補佐官の政務所を置き、その北に献馬を養う厩を置いた。東には兵器庫を置き、西にはオンドル部屋を置いて進膳の物を収蔵した。またその南の外には、特別に樓門を構え、下層には出入り口を、上層には鐘鼓を掛けて、時報の備えとして設営した。東には火薬庫が、西には大旗の倉庫が、東西対峙する（よう構えた）。みな垣根を廻らして、（壁は）磨かれて堅牢である。およそ家屋を造作すること二六〇間を数えた。そして屋舎ごとを独立させ、軒を連ねることがないようにした理由は、火災に備えてのことである。土地の縄張りや土台の確定や建物の造作が上手く進行了のは、みな（崔）公の指図の賜物である。（崔）公は、一日閣上にお出ましになって、郷中の父老を集め、竣工を告げて（建物に）命名しようと言った。ある者がこう言った。「済州の土地柄は、北は大きな海が横たわり、広々として一目すれば千里もあります。南は高い山を目の当たりにすれば、（樹木が）鬱蒼とする有様は四季を通じて同じ光景です。冬には苦しい寒さが無く、夏には涼しい風が多いです。家々にはミカンがあり、処々に良馬がおります。風や雲の有様や月夜の露の形状は、朝晩に変化し、形態は非常に様々です。そして上命をここに承る方が、この閣に登り、この閣に休めば、山の緑と波の音が、常に机の上にそれぞれ到来し、珍しい花や草が、すべて眼のなかに集まってくるでしょう。むかし楼があつて『万景』の名があつたのはこのためです。幸い今も閣はございます。よろしく『万景』の名を復活させるのが良いでしょう」と。（崔）公は言った。「そうではないな。予が閣を建てたの

は、景色を愛でて喜ぶためではないし、遊びや見物のためでもない。むかし（周の）文王の時代、周公は国内を治め、召公は国外を治めた。その徳化が人に及ぶ様は風が動くのと同じように、次第に浸透し影響を蒙り行き及んだ。そして当世の人は、必ずや徳化に奮い立たされその気質を変えてゆくのである。どうして周公と召公でなければ、弘く徳化を敷くことを助けて成就しようか。ただいま国王殿下は上にいまし、大臣と輔佐の臣下は、互いに慎み恭敬を致し、急ぎ賢者を求めて、地方の各地に派遣している。しかしなおも（殿下の）恵みはいまだ及ばず、治化はいまだ広がっていない。委任してもしかるべき人でなければ、上命を執行しても理を尽くすことができない。およそ憂いを共有する者は、日ごとこの閣に登って、気ままに遊ぶことなく、欲望をほしきままにすることなく、委任の責務を尽くすことを思い、常に王化を弘めて、民情を上申することに専念すれば、（いにしえの）周代の治を、今日また目にすることができよう。そうであれば、どうしてこの閣を『弘化』と名付けないことがあろうか」と。ここにおいて、聞く者はみな拝謝してこう言った。「崔）公の命名は、後々の人々をして、益々の努力を行わせることができよう。そして我が民の永遠に仁化を蒙る者は、益々（身を）保つことができよう」と。ついに（皆々）退去して、私が『弘化閣』の三字を書し、（閣に）掲示するように請うた。また（私が弘化閣のための）記を作成して、後世の人に（由来を）語ることを請うた。私はこの土地の人間である。道義として辞退できない。ゆえにケチなことを考えず、これがために（弘化閣）記を作成した。

詩に曰く、
漢拏^{かんな}の山は高し 駕籠^{がこう}の頂^{いたさ}
軍令を伝える太鼓と角笛が深夜に響くも事無く暁を迎える
山下にある邑城は大きな州と成り

十里に涉って泰平の時を謳歌する

周の召公のような善政を慕って 医民は安定する

大きな高殿の美麗さは 礼法を弘めた

軍規厳しき陣営の威風により、賊がもたらす愁いは破却した

後世の人は、きつと益陽侯（崔海山）のことを語るであろう

（西三十七）
正統二年丁巳孟春既望

郷人で前礼曹参議の高得宗^{こうとくそう}が記した

三 「弘化閣記」の内容と成立の背景について

前章で紹介した「弘化閣記」につき、本章では内容的な検討を行いたい。まず、その概要はおおよそ左記の通りである。すなわち冒頭に濟州島の地理と名称ならびに沿革を述べた後、一四三三年の秋から翌年夏にかけての旱魃の惨状について言及する。これを憂慮した国王世宗が、「濟州島は我が国の属領で、良馬と珍物の産地であるが、土地は痩せ民は貧しく、海賊と盜賊が横行している。対策を講じるため調査して上奏せよ」と命じたところ、崔海山の上聞が評価され、一四三四年秋に、濟州島の行政と軍事を管掌する安撫使と、馬政を担当する判牧事を兼ねて任命された。崔海山は濟州赴任後、救荒策の実施に尽力して勸農策を推し進め、祭祀も怠りなく行ったところ、明年以降、天候が回復して民生が復活し、馬も大いに繁殖したと言う。そして官舎焼亡を契機に、濟州官衙を大々的に造作し、その規模は二六〇間に及んだ。そして崔海山は土地の父老を召集し、殿閣に出御してその命名を諮問する。ある者は、「濟州島にある数多の美しい光景を見るという意味で、『万景閣』の名はいかがでしょう」と答えた。それに対し崔海山は、「この建物は物見遊山のため設けたのではない。国王殿下の徳化を弘めるという意味で、『弘化閣』と命名するのがよい」と述べ、皆々を感動させた。そして高得宗に『弘化閣』の三字を書かせて殿閣に掲示させ、その由来を述べた

『弘化閣記』の作成するよう要請した。高得宗は濟州島人ゆえ、この求めを辞さずに記文を作成し、詩を詠んだ、というものである。

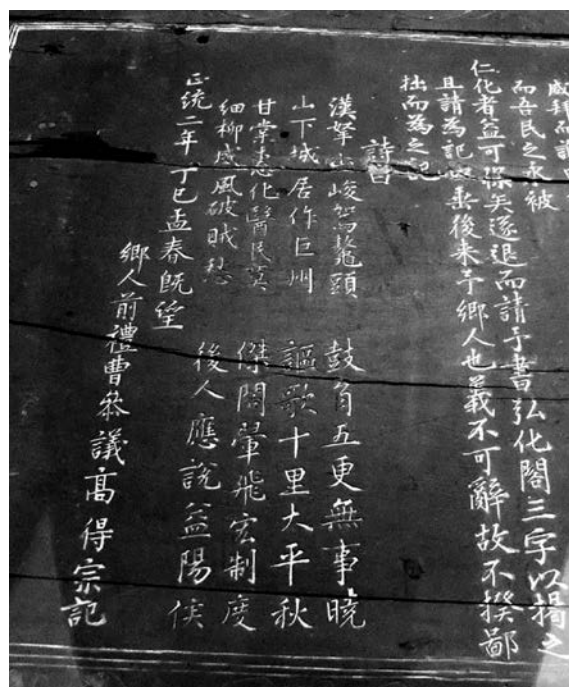
次に文章のまとまりごとに、内容を詳しく検討する。まず濟州島の地理・名称・沿革につき語っている冒頭部分であるが、漢拏山の名の由来につき、雲漢（銀河）を拏む程の高さのため「漢拏」と称したと説明する。そして山容から「円山」の別名があることに触れる。ついで濟州には「東瀛州」「毛羅」「耽羅」の三つの別称があることを指摘し、一四一六年、濟州安撫使から旌義県と大靜県が分立し、島内の行政区画が三分割されたことに言及している。そして濟州の沿革の解説に移り、最初に濟州島の創世神話、すなわち三神人（良乙那・高乙那・夫乙那）の地中湧出譚に触れる。いずれも梁・高・夫の三姓の始祖となった神々で、その故地は三姓穴として聖地となっている。そして濟州島の新羅帰服を述べた後、今の朝鮮王朝時代には、国王の徳化と懷柔の恩に浴して、風俗が変えられ民生が安定したとする。後者の辺りの筆致は、朝鮮の文教政策に順応して「開化」した辺境民の阿諛の弁に聞こえる。

ついで一四三三年秋から一四三四年夏にかけて起きた濟州島の早魃被害について述べる。ここで対応策を臣下に諮問したという世宗（一三九七～一四五〇）は、言わずと知れた朝鮮王朝の第四代国王（在位一四一八～一五〇）で、本名は李禔といい、高得宗にとりわけ深い信頼を寄せて常に庇護を与えていた。濟州島に対して世宗は、良馬と異貢の産地であり、国家はこれに頼っている、と言ったという。実は高得宗は、郷土に派遣されることに良馬を都に持ち帰ったと自慢するほど（『世宗』7年1123戊午）、濟州馬との関わりが深い人物で、前章で述べた通り、馬政に関してしばしば政府に提言し、一四三八年には種馬五〇匹を進貢するため明に派遣されている。また世宗の発言であるという、「土地は瘦せ民は貧しく、海賊と盜賊が横行している」という箇所は特に興味深い。後者の「草賊」とは、濟州島内に出没した「馬賊」すなわち泥棒を指

す。前章でも述べた通り、高得宗はかつて一四三四年に、「深山長谷の馬賊の興行（奥深い山谷に潜む馬泥棒の横行）」（『世宗』16年630乙亥）や「賊を作すの人、聚まりて淵数と為り、毎歳潜匿して公私の牛馬を盜殺する（泥棒を働く者が結集して巢窟となり、毎年隠れ潜んで官有・私有の牛馬を盗んで殺害する）」（『世宗』16年828壬申）弊害を指摘し、それがいずれも連年の早魃による凶作と関連があることを政府に主張していた。前者の「海寇」については、これが仮に倭寇を指しているのであれば、一四三〇年に濟州島に出現した倭船一隻に対し、濟州安撫使の金洽が攻撃して沈没させた上、倭人九名を斬り殺した事件を念頭に置いているのかもしれない（『世宗』12年325乙丑条）。この倭船は武装しておらず、降伏を申し出たのに金洽が斬殺した経緯が発覚して問題化した（『世宗』12年825癸巳）。この一件に関連して高得宗は、濟州島民の立場から金洽の行動を弁明し、罷免された金洽の復職を図っている（『世宗』12年1013庚辰）。なお高得宗は、一四一九年と一四二四年に、倭寇追捕の功を立てた濟州安撫使を褒賞する使節として、漢城から濟州に派遣された経験がある（『世宗』元年1115乙卯、6年117戊寅）。「弘化閣記」末尾の詩の内容、すなわち「鼓角の五更、無事の曉（軍令を伝える太鼓と角笛が深夜に響くも事無く曉を迎える）」や、「細柳の威風は賊の愁いを破り（軍規厳しき陣営の威風により、賊がもたらす愁いは破却し）」などから見て、この「海寇」は外から来る倭寇をイメージした可能性が高い。ただし、濟州島においては、濟州島民の海賊、すなわち「水賊」がいたことも忘れてはならない。水賊とは、自らを「豆禿也只」と称し、他者からは「頭無岳」と呼ばれた人々で、倭人の服を着ている者もいるが、倭語でも漢語でもない言葉、恐らくは濟州方言を喋るという海上勢力を指す（高橋一九八七）。そしてそうした勢力の存在を臭わせるような表現が、「弘化閣記」から見出せるのである（後述）。

次に崔海山（一三八〇～一四四三）の濟州安撫使就任の逸話が続く。

崔海山は、永川崔氏の出身で、火薬の調合法を高麗に導入したことで有名な崔茂宣の子である。本貫の永川は、「益陽」の別名を持つため（『世宗』地理志、慶尚道、安東大都護府、永川郡）、高得宗は崔海山のことを「益陽侯」とも呼んでいる。崔海山は、父の遺命を受けて火薬や火器の研究に尽力していたが、一四三三年に、女真族と婆猪江で戦闘した際、軍機を逸した罪を問われ、世宗十六年（一四三四）八月七日に済州安撫使に左遷された（『世宗』16年87辛亥）。この任命年月日は、「弘化閣記」と全く一致する。「弘化閣記」では、崔海山の済州安撫使任命のきっかけは、済州島に関する彼の上聞が世宗に歓迎されたからであると言い、その就任についても「略ぼ憚色無し（忌避するような素振りは何ほどなかった）」と描写するが、『実録』では「済州は海を越えたる絶域なり。人皆な為るを願わず（済州は海の方この辺境である。人はみな、その地方官になることを願わない）」（『世宗』16年87辛亥）



「弘化閣記」末尾

と記しており、実際は懲罰人事の結果であった。在任中の崔海山の行跡については、済州島の救荒や勸農、学問奨励や冤罪究明などの善政を行ったと、「弘化閣記」は誉め上げるが、『実録』に見える彼の行状は、済州島の珍物や珍獣を献上することで、世宗の気を惹こうと懸命になっている姿ばかりが目立つ（『世宗』17年921己丑、18年123甲子）。それが奏功したのか、一四三六年の末に、彼は中枢院副使に叙任された（『世宗』18年123甲子）。

よって崔海山による済州官衙の新造事業は、一四三四年秋から一四三六年末までの時期となるが、「弘化閣記」の記述から類推するに、一四三五年以降に工事が開始されたのではないかと思われる。そしてその際、廃寺の瓦や材木を転用して、「髡頂の者」と「入番の輩」を徴用し、まずは居間・政務室・浴室・厨房・廊舎を建造させた、という部分は非常に興味深い。「髡頂の者」とは髪を剃られた罪人を言うが、「入番の輩」は「番国（蕃国）に出入りする者」、すなわち外国往来者を指し、ここでは国禁を犯して処罰された海上往来者を意味すると思われる。ここで想起したいのは、一四一八年に高得宗が銀一七七一兩を済州島で買得したという事例である。済州島には銀山は存在しないため、これは島外からの将来品である。一五世紀前半の段階では、石見銀山は未だ再開発されていないため、日本産の銀である可能性は低い。恐らくそれは、蘭秀山の乱などで利用された中国江南地方と済州島との間にける非公式な海上航路と、深く関係しているのではないと思われる（藤田一九九七）。

さて崔海山によって新造された官衙建築の様相は、「弘化閣記」に非常に詳細に描写されている。最初に造営された安撫使の生活空間のための建築群のほか、執務所としての屋舎三棟、公文書の保管地としての楼閣三棟と二階屋、補佐官の政務所、献馬のための厩舎、兵器庫、進膳物のための収蔵屋、鐘鼓を備えた楼門、火薬庫、大旗の保管庫などなどの

建造物が列挙されている。そしてこれらの建築の多くは朱色の塗装がなされ、防火のために屋舎を独立させて建てられたことを記している。

ついで崔海山が濟州島の父老を召集して竣工を告げ、ひねもす殿閣に坐して命名を諮問する場面が登場する。そこで父老の一人が、「濟州島は北に大海原が広がり、南に樹木茂れる高山が聳えている。冬は寒からず、夏は涼しい。どこにでも蜜柑があり、駿馬がいる。山の緑と波の声、珍しい花と奇しき草を目の当たりにすべく、古名に因んで『万景閣』と名付くべし」と回答したというが、これは高得宗が心中に思い描いた故郷の美しいイメージを、父老に仮託して記述したものではないかと思う。しかし結局、殿閣の名前は、崔海山の意向に沿って儒教的色彩の濃い「弘化閣」となった顛末を、高得宗は長々と叙述している。本文の末尾の記述によれば、命名に至るまでの経緯を記した「弘化閣記」のみならず、建物に掛ける「弘化閣」の扁額も、高得宗が揮毫したとあるが、現存する扁額がそれに当たるか否かは確証がない。

最後に、「弘化閣記」の成立の背景につき、いくつかの疑問点を提示したい。その成立年は、末尾の年紀を信じれば、正統二年（一四三七）正月十六日のことであるという。一方、濟州安撫使の崔海山が中枢院副使に叙任されたのは、世宗十八年、すなわち正統元年（一四三六）十二月三日のことである。叙任の知らせが漢城から濟州島に到着すれば、崔海山は当然すみやかに同地を離任したものと思われる。この非常に微妙な時系列を考慮すると、「弘化閣記」を高得宗が、いつ、どこで撰文したのか、という問題が生じてくる。

一つは高得宗が濟州島で撰文したと考えるものである。「弘化閣記」には「前礼曹参議」と署名されており、一四三五年に礼曹参議に復帰した後、何らかの理由で再び解職されたため、高得宗は故郷の濟州島に戻っていた、と想定する。そして前年夏から濟州島に赴任していた崔海山と交遊を重ね、彼が新造した濟州の官衙を目の当たりにした。ついで

中枢院副使の叙任の知らせを受けた崔海山が、濟州島から離任する直前の一四三七年初頭に、高得宗が記念に「弘化閣記」を撰文したというものである。もう一つの仮説は、高得宗は漢城でこの「弘化閣記」を作成したというものである。高得宗は「前礼曹参議」として漢城に在留していたところ、濟州から中央の軍官職に着任するため帰京した崔海山に遭遇し、そこで扁額と記文の作成を依頼された。濟州官衙の詳細な描写は、崔海山から伝聞した情報に基づいて作文し、崔海山と濟州の父老のやりとりは、高得宗が潤色して半ば創作した、と考える説である。漢詩文の世界においては、現地に赴いた上での実景描写が必ずしもなされるとは限らず、虚構の世界を叙述することが往々にしてあるため（伊藤幸司二〇三、懐かしの故郷の濟州島につき、高得宗があらん限りの想像力を駆使して「弘化閣記」を漢城において撰文し、後日その記文と扁額の現物を濟州島に送付した、という可能性も少なからずあろう。なお崔海山は、一四三八年に感鏡道の江界節制使に任命されており、以後は朝鮮北部の国境地帯に転任し、漢城からも濟州島からも遠く離れた地に居した（『世宗』20年627己卯）。

「弘化閣記」がどこで作成されたのか、という問題はさておき、高得



弘化閣

宗が詠んだ漢詩に対し、崔海山が応酬して作成した詩が遺されている。「弘化閣記」の末尾に刻まれている高得宗の七言律詩に対する次韻詩で、『耽羅島誌』乾「館宇」（天理大学今西文庫）に、次のように収録されている。

拏嶽嵩高枕海頭 孤城突兀峙南州
齊風靡斷幾千載 鄉學重興已四秋
鑿井耕田蒙帝力 去奸辨曲蕩民愁
嘗聞出谷遷喬木 弘化應傳自我侯

《読み下し》

拏嶽は嵩高にして海頭を枕し
孤城は突兀として南州に峙つ
齊風の靡断すること幾千載
郷学の重興すること已に四秋なり
井を鑿ち田を耕すに帝力を蒙り
奸を去け曲を弁して民愁を蕩す
嘗て聞く 谷を出でて喬木を遷すと
弘化は応に我が侯より伝うべし

《現代語訳》

漢拏山は高く聳えて海のほとりに横たわり
ぼつんとした城は高く拔きんでてこの南の州にそぼだつ
古代の齊国ならぬ済州の風俗が衰え絶えて幾千年
郷土の学校が再度復興してすでに四年が過ぎた
井戸を掘り田を耕すのに帝の力を借り
奸賊を退け曲事を正して人民の悩みを消却した
先に聞いたところでは、谷を出で老樹を伐りだしたとのこと
殿下の徳を弘めることは、まさに私が伝えるべきであろう
右の崔海山の詩は、高得宗の詩と同じく、頭・州・秋・愁・侯の韻字

を踏んで詠まれている。その内容は、冒頭で漢拏山のことに触れつつ、済州島の古い風俗が後退して儒教化が進んでいること、島内の開発が進んで奸賊が撃退され悪事が消滅していること、殿閣造営のため材木を山中から伐り出したこと、国王の徳を弘める「弘化」の役割は自分にあること、などからなる。この詩が詠まれたのが済州島なのか漢城なのか、定かでは無いが、高得宗の詩の内容とよく対応した作品であるといえよう。

なお「弘化閣記」は、後世編纂された『新增東国輿地勝覧』卷三十八「済州牧」の「宮室」の項に、「甲寅秋八月初七日」から「請予書弘化閣三字、以掲之」の箇所に限って部分引用されている。また「景勝」の項に、済州島の地理的特徴を示す文章として、「弘化閣記」にある「北枕巨海」「南對崇岳」「家々橘柚」「處々驛驢」の対句表現が引用されている。また『耽羅島誌』乾は「弘化閣記」の全文を引用し、崔海山の次韻詩や、後世の済州牧使の金泰廷（宣祖二年（一五六九）文科及第者）による次韻詩などを収録する。ただし『新增東国輿地勝覧』『耽羅島誌』ともに、正統二年の年紀部分と、高得宗の署名部分を引用していないため、いつの時代の作品か、不明瞭となっている。



済州島南西海岸から遠望した漢拏山（右奥）

むすびにかえて

故郷の済州島に対し、高得宗には強い愛着があった。「弘化閣記」の本文において、「予は郷人也（私はこの土地の人間である）」と述べ、署名部分においても「郷人」の二字を「前礼曹参議」という肩書きの上にわざわざ冠している。故郷の人々への思いも篤い。一四二五年、彼は私邸で催した宴席にて、次のような言葉を吐いたという。「得宗、登第以後、済州に入れば、則ち多く良馬を収めて来たれり。交も権貴と結び、能く威福を済人に作せり。故に済人の得宗に事うること父兄の如し（わたくし得宗は、科挙に及第して以来、済州に行けば、たくさん良馬を得て都に連れてきた。高い出自の権勢家とコネを作り、済州の人たちには威光を示したり恩を着せたりしたので、彼らはわたくし得宗に父兄のように仕える）」と（『世宗』7年1123戊午）。そして縁族の文邦貴の汚職が発覚した時は、高得宗が必死に庇い立てたため罪を免れ、ついに文邦貴は礼賓寺判官に叙せられたと豪語した。まさに高得宗は済州島の出世頭であり、中央官僚の立場を大いに利用して、土豪勢力の利益の代弁者として振る舞っている。そして済州島の立場に立ち、様々な献策や提言をなしていたことは、前述した通りである。そうした時、彼が強調するのは、「弘化閣記」でも「其の地は薄く民は貧しく」と表現した済州島の貧しさである。「然して済州は土地磽确にして、農人の家、南畝に服勤するも、艱難辛苦は其の功に百倍し、常に卒歳に無食の嘆き有り（そして済州は土地が石ころだらけで痩せているので、農民が田畑を一生懸命耕しても、かかる苦勞は収獲の百倍で、いつも年末には食物が無くなって嘆いている）」（『世宗』1年911癸丑）。故に政府は済州島に対して格別の配慮を施し、島民の生計が立つよう善処して欲しい、と提言する。そして済州島の貧困を語る高得宗の筆致は、後に通信使の正使として往復する対馬の印象と似通っているのが興味深い。一四四〇年、日本の京

から本国へ帰る途上、対馬島主宗貞盛がこう語ったと、高得宗は朝廷に報告した。「本島は山石磽确にして土の耕すべき無きは、大人目撃する也（対馬は石ころだらけで耕作不能の地であることは、貴殿も御覧になられたでしょう）」と（『世宗』22年529庚午）。これは貞盛の口に仮託した、高得宗の対馬イメージではないかと思われ、土地が痩せけけ民は貧しい対馬の現状を目の当たりにした高得宗は、済州島の情景と重ね併せたのであろう。そして対馬島民の孤草島出漁要望につき、高得宗は政府に対して熱心に取り次いでいる。その理由は、「殊俗を待するの道は、恩信以て撫綏し、衣食以て周急にすれば、乃ち以て誠服すべし（異国人の待遇方法は、恩義をもって慈しみと安心を与え、生業を速やかに成り立たせれば、彼らは心から服従するであらう）」（『世宗』22年529庚午）と。貧しさゆえに「海寇」や「草賊」が横行する済州島の現状を知る高得宗は、同じく貧しく生業に乏しい対馬島民に同情し、異邦人に出境漁業の機会を与えようとしているのである。

都で異例の出世を遂げた「辺境人」の高得宗は、都人にとっては、どこまでも「異邦人」であった。司憲府や司諫院などの官僚は、彼を弾劾する際、「得宗は海外の人と雖も、元より髻稚より京都に來學し、第位を捷科して堂上官に至る（高得宗は海外の人とは言え、もともと幼年の頃より漢城に來て學問をし、科挙に及第して堂上官にまで出世した）」（『世宗』21年421戊戌）、ないしは「中樞院副使の高得宗は、海島微生を以てするも、特に上恩を蒙り、位は堂上に至れり（中樞院副使の高得宗は、島国の卑しい生まれであるのに、国王殿下の恩義を特別に受けて、官位は堂上官にまで出世した）」（『世宗』23年719癸丑）などの表現をもって彼をおとしめている。辺境人の分際で出世を遂げ、世宗の恩義を笠に着て、やりたい放題している、という宮仕えの者たちの激しい嫉妬の感情を、ここに見ることができる。一四四九年、世宗の薨去に伴い新たに即位した文宗は、高得宗に対する司憲府の糾弾に対し、高得宗

をこう評して切り捨てた。「得宗は耽羅の人なり。稍や詩律に工みなるも、然して性本より利を貪り、浮誇を尚び、官産を以て事と為し、名節を顧みず（高得宗は耽羅の人である。詩作はまあまあ上手であったが、その本性は、利益をむさぼり浮ついたことを尊ぶもので、営利活動に専念し、名譽や節度には目も掛けなかった）」（『文宗』即位年104甲申）と。最後の文宗の人物評は、ひどいものではあるが、半分は当たってはいる。高得宗の言動を見ると、交易による利益獲得に対し、常に積極的に肯定しているからである。海外との非公式な交易（弘化閣記）に見える「入番の輩」が行ったものを、目の当たりにしていたであろう済州島人の高得宗にとっては、何ら恥じ入ることの無いものであったろう。しかし都人の目においては、そうした態度はいかにも無節操なものに映り、嫌悪と嫉妬を買ってしまったものと思われる。

済州島に対する眼差しは、高得宗「弘化閣記」（二四三七年）以降は、もっぱら本土の知識人の記録が占める。申叔舟（一四一七～七五）が済州牧使に赴任する金好仁に送った送別詩序（一四六七年）は、典型的な済州島イメージが記されている（『送金同年好仁安撫済州序』『保閑齋集』卷十五）。申叔舟は高得宗より一世代後の文人で、『海東諸国紀』（二四七一年）の著者として名高い。右の送別詩序で申叔舟が示した「然れども商販輻輳し、主客雑沓し、地は痩せ民は貧しく、遺風悍俗、尚お存する者有り（しかし商人が集まって、売り手と買い手が入り混じり、土地は痩せて人民は貧しく、古くて猛々しい風俗が今なお遺っている）」という済州島観は、交易と貧困と旧俗の要素が入り混じった典型的なイメージである。と同時に、「況んや州の西は中国の明州に値り、東は日本の九州に当り、南は瑠球諸島に通ず。海賊出沒し、滄波阻隔すれば、救援するも不時なり（ましてや済州の西には中国の明州に行き当たり、東には日本の九州に当たり、南は琉球の島々に通じている。海賊が出没して海原が障壁となつていたので、いつも本土から救援する

ことはできない）」という、済州島を東アジア世界に位置づけた地理認識は、非常に斬新であり画期的な認識である（藤田・李・河原二〇〇二）。しかしそうしたリアリスティックな済州島イメージは、後世になるほど後退してゆき、一五二〇年の金浄「済州風土録」（『冲庵先生集』卷四）など、十六世紀の中央官人の済州島イメージは、異俗の辺境地としてあからさまに見下したものとなる。金浄（一四八六～一五二一）は、中央の政争に巻き込まれて済州島に配流された人物で、心がささくれ立っていたのか、見るもの聞くもの何れもお気に召さなかったようである。「此の邑の風土は、別けて是れ一区なり。事々殊に異なり、動もすれば吁駭すべし。一つも観るべき無し。氣候は冬は或いは温かく夏は或いは涼し。変錯して恒無し。風氣は暄の似し。人をして甚だ尖利ならしむ。人の衣食は節し難し。故に疾を生じ易く、加えて雲霧を以て恒に陰翳し、霽を開くこと少なし（この地の風土は、独特な一領域となっている。物事が非常に異なっていて、驚き嘆くことばかりである。見るべきものは何も無い。氣候は冬は温かく夏は涼しい。変化が激しく安定しない。風は晩春の風のようなものである。そのため人は利益に敏感となる。人は衣食を管理するのが難しい。ために病気になる易い。さらには雲と霧のために、常に曇天で、空が晴れることは少ない）」云々と、鬼界ヶ島の後寛僧都のような嘆き節が続く。氣候は寒からず暑からずで、蜜柑と良馬があふれる良い所、といった高得宗が語るところの樂觀的な済州島イメージとは、全く異なっている。立場が変われば同じ対象でも全く別に目に映る事例として、この済州島イメージは、今後とも研究対象にすべきものかと思われる。

註

- (1) この「釣魚禁約」は、いわゆる孤草島釣魚禁約を指すが、「米谷二〇一九」では、高得宗が口添えをした一四四〇年に成立したかのように記していた。「釣魚禁約」が成立したのは、翌一四四一年の誤りである。訂正したい。
- (2) 濟州島が新羅の時代に本土に帰服した、と高得宗は認識しているが、同地に地方官が送られるようになるのは、高麗時代以降のことである。
- (3) 一四三〇年に濟州島に出現した倭船一件につき、「米谷二〇一九」では高得宗がこの倭船と交戦して倭人九名を斬殺したと記したが、これは実録の該当記事を読み間違えたもので、交戦したのは濟州安撫使の金恰である。修正したい。

参考文献

- 伊藤幸司 二〇一二 「遣明船時代の日本禅林―芳澤報告へのコメントにかえて―」
『ヒストリア』二三五号
- 高橋公明 一九八七 「中世東アジア海域における海民と交流」(『名古屋大学文学部
研究論集』史学第三三号)
- 高橋公明 一九九〇 「濟州島出身の官僚高得宗について」(『名古屋大学文学部研究
論集』史学第三六号)
- 藤田明良 一九九七 「蘭秀山の乱と東アジアの海域世界―一四世紀の舟山群島と高
麗・日本―」(『歴史学研究』第六九八号)
- 藤田明良・李善愛・河原典史 二〇〇一 「島嶼から見た朝鮮半島と他地域の交流
―濟州島を中心に―」(『青丘学術論叢』第一九集)
- 米谷 均 二〇一九 「東シナ海における濟州島のイメージ」(『歴博』二二三号)
- (早稲田大学商学部、国立歴史民俗博物館共同研究員)
- (二〇二〇年一月二七日受付、二〇二〇年七月九日審査終了)